

新約聖書 ヨハネによる福音書 9章1節—41節 (新共同訳)

<sup>1</sup>さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。<sup>2</sup>弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目の見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」<sup>3</sup>イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。<sup>4</sup>わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。<sup>5</sup>わたしは、世にいる間、世の光である。」<sup>6</sup>こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。<sup>7</sup>そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。<sup>8</sup>近所の人々や、彼が物乞いをしてきたのを見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。<sup>9</sup>「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。<sup>10</sup>そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、<sup>11</sup>彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」<sup>12</sup>人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

<sup>13</sup>人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。<sup>14</sup>イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。<sup>15</sup>そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」<sup>16</sup>ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。<sup>17</sup>そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。

<sup>18</sup>それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということ信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、<sup>19</sup>尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目の見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」<sup>20</sup>両親は答えて言った。「これがわたしどもの息子で、生まれつき目の見えなかったことは知っています。<sup>21</sup>しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」<sup>22</sup>両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちの恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。<sup>23</sup>両親が、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。

<sup>24</sup>さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」<sup>25</sup>彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」<sup>26</sup>すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」<sup>27</sup>彼は答えた。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」<sup>28</sup>そこで、彼らはののしって言った。「お前はあの者の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。<sup>29</sup>我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」<sup>30</sup>彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。<sup>31</sup>神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。<sup>32</sup>生まれつき目の見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。<sup>33</sup>あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならないはずです。」<sup>34</sup>彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

<sup>35</sup>イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。<sup>36</sup>彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。そ

の方を信じたいのですが。」<sup>37</sup> イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」<sup>38</sup> 彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、<sup>39</sup> イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

<sup>40</sup> イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。<sup>41</sup> イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

### 説教「目を開けた人」

ヘレン・ケラー（1880年-1968年）という、「見えない」「聞こえない」「話せない」という三つの障害を抱えながら、この困難を克服し、教育・福祉に生涯を捧げた人がいます。

ヘレン・ケラーは次の言葉を残しています。「私は、自分の障害を神に感謝しています。私が自分を見出し、生涯の仕事、そして神を見つけることができたのも、この障害を通してだったからです」。

活動の最中（さなか）、ヘレン・ケラーは、中傷を受けることがありました。ヘレン・ケラーの二度目の来日のニュースが入った際、日本の元将官（軍隊で大将・中将・少将であった人）たちが「あれは盲目を売り物にして居るんだよ」とこき下ろしたことがあったそうです。それに対して、重光葵（しげみつまもる）という外交官であり政治家であった人が、中傷をしていた人たちについてこう述べました。「彼等こそ憐れむべき心の盲者（もうしゃ）、何たる暴言ぞや」。

盲者（もうしゃ）とは、目の見えない人を指す言葉です。「心の盲者（もうしゃ）」とは、肉体の目は見えていても、心の目がふさがれていることを、言い表しているのでしょうか。

本日の福音書には、見えない人の目を見えるようにしたイエスの救いの業と、そのあとの周囲の反応と問答が記されています。

イエスは通りすがりに、生まれつき目が見えない物乞いの人を見かけました（1節、8節）。弟子たちは、この人が生まれながらにして目が見えないのは、本人や両親の罪によるものかとイエスに尋ねます（2節）。弟子たちのこの問いの根底には、この世において人間が受ける苦しみは、人間が犯した罪の報いであるという因果応報の考えがあります。

この人の目が見えないのは「だれの罪」によるものか、という弟子たちの問いに対して、イエスは全く違った視点から答えました。「神の業がこの人に現れるためである」と（3節）。弟子たちは、本人の目が見えない原因と、誰の責任かを問いました。ですがイエスはそれに対して、苦難の要因ではなく、苦難の目的と意味とは何であるかを答えたのです。

イエスにとって大切なことは、生まれつき目の見えない人に負わされた苦しみの原因と罪を詮索することではなく、その人の人生に希望と光を与えること、運命の堅い扉を開いて、そこに神の御業をあらわすことでした。

さらにイエスはこう言います。「わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る」（4節）。これは、どういうことでしょうか。イエスは、これから行うこの目の見えない人への救いの業を含めて、地上でのご自身の働きが、どのようなものであるかを語っているのです。

それは、イエスの地上での働きには限りがあるということです。つまりそれは、「まだ日のあるうち」という言葉に表された、限られた時間の中での働きであり、夜が来ると終わらねばならない働きだということです。神の働きそのものには、限界も制約もありません。しかし、イエス・キリストが人間の肉体をもって行う地上での働きには、始まりがあり、また終わりがあるということです。

イエスはそのような限られた時間の中で、父なる神からご自身に託された業を、力を尽くして行わねばならなかったのです。

「イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった」とあります（14節）。イエスが目の見えない人への癒しを行なったのは、安息日の出来事でした。安息日には働いてはいけないという律法が、人々の間で問題視されます（出 20:8-10、申 5:12-14）。しかしそのような安息日の戒めも、イエスの地上での働きを妨げることはできないのです。

目の見えなかった人は、イエスが唾を付けてこねた土を目に塗られ、イエスの指示どおりシロアムの池に行き行ってそれを洗うと、目が見えるようになりました（6節-7節）。したがってその人は、イエスの姿を見ていませんでした。その人は、イエスについて何の認識もない中、周囲の人々からいろいろとイエスについて問い詰められます。

そして、イエスについて分からないながらも、その人はこう答えました。「ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです」（25節）。これは、極めてシンプルであり、また、本当の答えであると思います。これだけが、イエスについて、その人が唯一知っていることでした。これは、イエス「について」の知識ではなく、その人が身をもって体験した真実でした。

イエスによって目が見えるようになったその人は、ファリサイ派の人々から尋問され、圧力をかけられますが、それに屈することなく自分の心を偽らず、正直な受け答えをしました。そのことが彼らの怒りに触れ、次のように言われてその人は外に追い出されます。「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」（34節）。

目が見えるようになったその人の幸いを共に喜ぶわけでもなく、むしろ裁き、弾圧したファリサイ派の人々は、肉体の目は見えていても、心の目は盲目でした。

目が見えるようになった人が外に追い出された、すなわち共同体から追放されたことをお聞きになったイエスは、その人と再会しました（35節）。ここで初めて、その人はイエスの姿を肉眼で見ることができました。そしてイエスとの対話によって、次に、心の目が開かれたのです。

さて、早いもので3月中盤に差し掛かってきました。

年齢を重ねていくと、視力や聴力が弱くなったり、あちらこちらの体の箇所故障が出てくるかもしれません。しかし、単なる生物ではなく霊的存在である人間は、年齢を重ねることですべてが均一に衰えていくわけではありません。肉体が元気だった頃には開かれていなかった心の目が開かれていくという、大いなる恵みと恩恵を与えられることがあるでしょう。

あなたの試練や苦しみは、決して無駄にはなりません。それはあなたの心の目が開かれていくために用意され与えられていたものであることを、いつも心に覚えていてください。

そしてまた、コリントの信徒への手紙 一 10章 13節にあるこの言葉をいつも心に留めていてください。「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」。

神はいつも私たちを、愛をもって見守り、導いてくださっています。私たちは、神様の愛に信頼して、希望と喜びのうちに共に歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。私たちが、自分でも理解できない状況に置かれた時に、私たちを通して働かれるあなたの御業によって、まことの光がこの世に輝くようにしてください。御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 サムエル記上 16章1節—13節（新共同訳）

<sup>1</sup> 主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」<sup>2</sup> サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けばわたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、<sup>3</sup> いけにえをささげるときになったら、エッサイを招きなさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者に油を注ぎなさい。」<sup>4</sup> サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」<sup>5</sup> 「平和なことです。主にいけにえをささげに来ました。身を清めて、いけにえの会食と一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。<sup>6</sup> 彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。<sup>7</sup> しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」<sup>8</sup> エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」<sup>9</sup> エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」<sup>10</sup> エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」<sup>11</sup> サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」<sup>12</sup> エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」<sup>13</sup> サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ち去ってラマに帰った。

新約聖書 エフェソの信徒への手紙 5章8節—14節（新共同訳）

<sup>8</sup> あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。<sup>9</sup> ——光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。——<sup>10</sup> 何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。<sup>11</sup> 実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。<sup>12</sup> 彼らがひそかに行っているのは、口にすることも恥ずかしいことなのです。<sup>13</sup> しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。<sup>14</sup> 明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

教会讃美歌 教会讃美歌 289番「すべてのひとに」、教会讃美歌 328番「主イエスにしたがう」、教会讃美歌 337番「やすかれ」。